帖木兒と永樂帝

——帖木兒の支那征伐の計畫——

撒馬兒罕の英雄帖木兒が中央亞細亞印度から東歐羅巴にかけて威を振つた後に、更に鋒先を支那に向けたが、征途幾何ならずして訛打刺（オトラール）で病歿し、絶倫の功業半ばにして挫折したことは、史上に有名な事實であるが、彼の支那に對する始終の政略は、一向世間に發表されて居ない樣である、彼の此の計畫は夙くからの宿志であつたので、從がつて愈々軍を指揮して東に向ふに至る迄には、種々込み入つた徑路がある樣に思はれる、彼の死歿の時は、支那では丁度明一代の英主永樂帝の在位中である、兩者の時代の接觸は僅かに二三年にすぎないけれども、兩英傑の同一舞臺に於る對立交渉の有樣は一個史上の偉觀と思はれるから、暫らく題をこれにかりて彼が支那征伐の計畫の跡を尋ねて見やう。

明と帖木兒との修交のことは實に洪武二十年、即ち西紀の一三八七年に始つて居る、尤も太祖洪武帝の即位以來、明は西域地方に通じやうとして度々使を遣はして招諭したけれども、とかく要領を得ないで此の時に至つたので、帖木兒の即位の時から數へて見ると十七年目に當る年である、これ以前の事は今茲に述べる限りではないが、只何が故に此時に初めて修交するやうになつたかといふ疑問に答ふるが爲に、當時帖木兒の東方の障壁ともいふべき地方、即ち今日の新疆省の哈密（カミ）、哈剌和卓（カラコージャ）、魯克沁（ルクチン）、土魯番（ツルファン）などが、漸次明に修貢して、明朝の勢は更に漸やく